

カントの超越論的演繹一般について

On Kant's Transcendental Deduction in General

細 谷 章 夫

HOSOYA Akio

序章 問題提示

筆者はすでに、2つの論文⁽¹⁾において、カントの超越論的演繹に関する議論をすすめてきた。それはカントの構成的原理の本質をなすものとして、とらえた結果であった。そしてそのうち、この構成的原理に対する統制的原理の考察をおし進めてきた。それはまだ十分ではないにしても、一応、統制的原理の議論を終了し、この構成的原理との観点から比較してみると、当時は完全と思っていた2つの論文に、どうしても満足できなくなった。そこで再び他の視点から、カントの超越論的演繹をとらえていく必要を感じた。それがこの論文を書く動機である。他の視点からとはやや詳細な解釈は省略して、全体としての見通しをよくしようというものである。とはいえ、この論文および次の論文においても、引用文を入れる必要が生じた。それは近い将来書くべきカントの構成的原理に関する、まとめの論文では、引用文を全く排除しようと考えているからである。そのため予備的な論文との意味で、引用文およびその解釈を述べるとの方式をとらないわけにいかないのである。

この論文を書くもう1つの動機は次のとおりである。先の論文ですでに言及した箇所ではあるが、第13項「超越論的演繹一般の諸原理について」、第14項「カテゴリーの超越論的演繹の移りゆき」（この第13項、第14項という項そのものの番号は第2版ではじめて付されたもの。しかし第2版では第14項の最後の部分で、一部の削除と加筆があるが、基本的には第1版、第2版に共通の内容である）が、非常に重要な箇所であることに気付いた。そこでここをしっかりと解釈しておこうというのが、この論文の1番の目的である。カント自身も述べているが、第1批判の超越論的演繹は認識の基本的問題に関係するので非常に重要である。とくにこの第13項、第14項での概念と直観についてのカントの考え方は、言い淀みがあり、繰返しがある。それに対して、それに先行する超越論的感性論および超越論的論理学の最初の部分での、直観と概念のカントの考え方は、実にすっきりしていて明解である。したがってカントの思想を發生的に見れば、超越論的演繹に関する厳格な考察をへて、その結論にしたがって、感性論や論理学の最初の叙述がなされたのではないか、というのが私の見方である。つまり超越論的演繹に関する考察の結論が、いわば織り込み済みのかたちで、叙述上それに先行する感性論や論理学に述べられているのである。これはカントには珍しいことではない。今はそのことを論ずべきところではないが、たとえば第1批判において、現象と物自体と

が厳格に区別され、論ぜられるのは弁証論においてである。つまりアンチノミーとくに第3と第4アンチノミーを回避するためには、その区別はカントにとって絶対に必要だったのである。そしてそれはすでに現象という言葉で、すでに織り込み済みの仕方で、アンチノミーに先行する感性論、それにつづく論理学に現れていたのである。このことはカント思想の難解さの1つの原因でもあるが、また当然のことだが、カントの思想は第1批判なら第1批判全体の文脈の中で、とらえなければならぬということである。部分的な章句のみをとらえての解釈は、ときには誤りへと導く可能性がある。これに関してはこれまでとして、第13項および第14項を詳細に吟味することは概念と直観に関するカントの考え方を明確にする点において、重要であるといいたいのである。

本論文の第1章では超越論的演繹とは何かということ、そしてとりわけカテゴリーの演繹の必要性と同時に困難さが述べられる。第2章では概念と直観のかかわりあい为主として述べられる。これはカントの実際のカテゴリーの超越論的演繹では、第2版にしたがえば、統覚、想像力〔構想力〕、覚知などの諸原理によって演繹が行われ、説明される。しかしその考え方の基本は概念と直観とのかかわりあい方なのである。したがって第2章では実際のカントの演繹に入る準備段階として、概念および直観を明確にすることを目的とする。そのさい後述の冒頭において、まず全体の要約を述べ、のちに詳述するという仕方をとる。それはカントの思想は難解なので、カントの論述にしたがうと結局、その難解さを抜けきることができない。全体像をはじめに与えておいて、できるだけカントの考えを見通しのよいものにしようとする筆者の意図による。したがって読者にとって、全体像の叙述は、場合によっては唐突に感ぜられるかもしれぬ。しかし叙述がすすむにつれて、明確になっていくはずである。

ところで純粋悟性概念（カテゴリー）の演繹とは一体、何であるのか。一言でいえば、どのようにア・プリオリな概念が、経験あるいは認識の形成にかかわりをもつのかを説明することにある、といえる。あるいは学的認識を形成するとの認識論の立場からいえば、私たちの認識はどのような仕方でア・プリオリな概念とかがわり、どのような仕方で認識の客観性の本質である、一般性と必然性とを獲得するのかを説明することでもある。そしてここでア・プリオリなものとは、基本的には直観形式としての空間と時間であり、さらに諸カテゴリーのことである。それらは経験および経験から構成される認識に含まれているア・プリオリな概念である。しかし他方、ア・プリオリなものから経験および認識とのかかわりあいについて説明がなされるときにも、ア・プリオリな原理が登場する。たとえば統覚である。これはいわばこの関係の説明のための原理であって、経験やそれから構成される認識のうちにあるア・プリオリなものから、一応区別することも可能である。そしてカントはその関係の説明のための諸原理を、カテゴリーの超越論的演繹の諸原理と呼んでいる。しかし深く考えてみると、経験および認識に含まれるア・プリオリなもの、その説明のために用いられるア・プリオリな原理とを区別することは正しいやり方ではない。なぜならば超越論的演繹の諸原理に現れるア・プリオリな概念、とりわけ統覚は、私たちの経験および認識の形成に関してもっとも基本的なところで結びついているからである。いいかえれば、私たちの経験および認識の形成にとって、もっとも根本的な原理だからである。筆者はこれら超越論的演繹の諸原理に関して

は、次の論文で論ずることとする。

第一章 超越論的演繹の必要性和困難さ

カントは「純粹悟性概念の演繹」を「超越論的演繹」ともいっている。超越論的演繹ということによって純粹悟性概念の演繹がもっている1つの性格を示そうとしている。ではその性格とはなにか。それを説明するのが本章の主な目的である。すなわちカントによると、私たちの経験には、あるいは経験をとおして構成される認識にはア・プリオリなものが存在するという。このア・プリオリなものが、経験および認識にどのようなかわりをもつのかを示されなければならない。これが超越論的演繹の必要が起こる理由である。しかしア・プリオリなもの、とくにカテゴリーはその本性上、経験を越えて機能する面をもつ。そこに演繹のもつ困難さがある。以下、やや詳しく論じていくことにしよう。

カントの認識論において、もっとも特徴的であるのは、私たちの経験の中に、あるいは認識に、ア・プリオリとしかいいようのない概念が存在する、という主張である。これが私たちがカント哲学を理解するうえでの基本的前提である。カントの主張は終始一貫して、この考えのもとに構築されている。のちに言及するが、ロック・ヒュームの哲学上の功績を認めながらも、ロック・ヒュームの経験論に激しい非難をあげせるのも、私たちの認識にア・プリオリな存在するかどうかに関してなのである。認識においてア・プリオリなものか存在するというカントの基本的前提に関しては、カント哲学全体を見渡したうへ吟味されなければならない。筆者の現在の考え方を簡単にいえば、非ユークリッド幾何学の出現以来、各々の哲学者によって論じられたように、数学に関しては、カントの考え方は修正されなければならないと考えている。しかしそれ以外の点で、カントのア・プリオリな考え方はなお、十分に支持される面をもっているとも考えている。しかしこの問題にはここでは論じない。ここでは、カントがいうように、ア・プリオリな概念が存在するということによって、あるいはこれを前提することによって、どのような考え方が引き出されるのか、そこに力点をおいて論ずることとする。

まずカントは次のようにいう。「人間の認識という非常にこみ入った織物をなしている多種多様な概念のもとには、しかしながら、また純粹な使用のために（すべての経験に全く依存しないで）ア・プリオリに規定されている、いくつかの概念があり、これらの諸概念の権限はつねに演繹を必要とする。……」(A⁸⁵_{B¹¹⁷})⁽²⁾つまり人間の認識のうちにはいろいろな概念が入り込んでいて、その中には、全く経験に依存しない、ア・プリオリな概念があること、そのような概念に対しては、「演繹」が必要だということのである。カントはその演繹を諸概念の超越論的演繹 die transzendente Deduktion derselben (A⁸⁵_{B¹¹⁷}) と名づける。では超越論的演繹とは何か、ア・プリオリな概念がどのように対象と関連するのかを説明するのが超越論的演繹であるという(A⁸⁵_{B¹¹⁷})。しかしこれは超越論的演繹の内容的な説明である。それはそれでよしとして、まず「演繹」とは何か、「超越論的」とは何かを問おう。そのことによって、超越論的演繹の別の側面が見えてくるからである。

演繹は帰納に対立して、一般的な原理（前提）から、特殊な個々のものを推論し、説明するとの本来の意味あいをもっている。しかしカントはそれだけでなく、この演繹が本来、法律用語として使われていることに着目する。カントの説明によると(A⁸⁵_{B116})、法律学者が1つの訴訟事件において、何が合法的であるかに関する問題と事実に関わる問題とを区別するという。つまり権利問題と事実問題との区別である。そして権限あるいは権利の要求を説明するための権利問題の証明を、演繹と名づけているのだという。カントが本来の演繹とは別に法律学者の用法になぞらえて、この演繹の語を使用しようとするのは一体なんであるのか。それは次のように考えられる。法律学者が、訴訟事件において、事実問題とは別の根拠、つまり権利問題から説明しているということである。カントの演繹にはこのやり方が適用されている。つまり経験による説明ではない。経験とは別の根拠、ア・プリオリな概念からの説明である。それがもっともよく表されているのが第2版で、単純化していえば、統覚による総合的統一、生産的想像力〔構想力〕そして覚知の総合へと進んでいく。第1版もよく見れば、やはり同様なことが行われていると見ることができる。しかし第1版では経験が成立するまでの、時間的経過にしたがった諸原理から、説明が始まる。すなわち直観における覚知の総合であり、次に想像〔構想〕における再生の総合であり、最後に概念における再認識の総合である。つまりこれらは感官、想像力〔構想力〕そして統覚の機能による詳しい説明である。それら諸原理が説明されて、あらためて第3節(A115-128)のはじめの部分で統覚からの説明が試みられているのである。とはいえそれは演繹という点からきわめて不徹底なものであり、それが第2版において、大きく書きかえられた1つの理由であろう。したがって「演繹」という側面から見れば、第2版は形式的には、より整合的なものになっている。すなわちア・プリオリな概念から、経験への橋渡しとの関連と、一般的な原理から、個別的なものへの推理が遂行されている、というのが筆者の考え方である。とはいえ、最初から第2版の演繹論だけが与えられていたら、カントの思想を簡単に⁽³⁾理解することはできないだろう。第1版の演繹論には第1版なりのメリットがある。私は先の論文において、第1版と第2版を比較して次のように書いている。「というのは、第1版もなるほど難解であるが、少なくとも第2版に比べて、その原初的なカントの思考方法が残存しているので、読むものにとって興味深く、その意図がわかりやすい。第1版は理論的に十分に整理されていないかもしれぬが、かえってそのことが理解を容易にしているように思われる。」

次に「超越論的」に関して述べよう。のちに述べることになるが、カントは感性論ですでに「超越論的演繹」をなした(A⁸⁷_{B119-120})と述べている。しかし感性論にまず出て来るのは「空間の概念の超越論的論究」transzendente Erörterung des Begriffs vom Raum(B40)で、超越論的演繹との語は感性論にはない。しかもこれは、第2版においてつけ加えられた標題である。しかしながら、カントがここを指していることは間違いない。ここにおいてカントは「超越論的論究」を「形而上学的論究」（これも第2版でつけ加えられた標題である）(B38)と対比して使用している。カントの説明によると(B38-40)、論究とは、ある概念に対して明確な表象を与えることをいい、その論究が形而上学的とは、その概念をア・プリオリなものとして叙述することである。それに対して、超越論的論究とは、他のア・プリオリな総合的認識の可能性〔ここでは幾何学の可能性をいっ

ている]が、そこから理解される原理として、ある概念〔ここでは空間のこと〕を説明することである。カントの感性論でのここでの仕組みを簡単にいえば、空間の概念の形而学的論究で、空間のア・プリオリな性格が示される。この空間のア・プリオリな必然性から、すべての幾何学の公理のもつ正しさがのちに証明されるのである(それが超越論的論究の仕事)。とりあえず、空間のもついくつかのア・プリオリな性格がここで提示される。それが空間概念の形而上学的論究である。それに対して空間の概念の超越論的論究とは、この空間のもつア・プリオリな必然性から、幾何学の原理〔公理〕の正しさが説明される。たとえば、2点間の最短距離としての直線、あるいは平行線公理など、これらすべて空間そのものがもつア・プリオリな性質から、その正しさが説明される。このことはなにを意味するのか。学としての幾何学のもつ原理〔公理〕の正しさは、幾何学そのものによっては説明されえないが、学としての幾何学はア・プリオリな空間の概念によって説明されたことになる。逆にいえば、学としての幾何学はそれ自体、客観的な認識として、広く認められているのであるから、超越論的論究によって、形而学的論究で示された空間のア・プリオリな諸性質の正しさが間接的に証明されたことになる。つまり超越論的論究は、空間のア・プリオリな諸性質と客観的認識として広く承認されている幾何学の原理〔公理〕との橋渡しをすることにより、空間のア・プリオリな諸性質の正しいことを間接的に証明したことになる。したがって「超越論的」とは一般に、ア・プリオリなものによく知られているもの〔ここでは幾何学〕、あるいはよく知られている、経験との間の橋渡しをし、逆にア・プリオリなものの正しさを間接的に示そうとするものである。だから「超越論的演繹」とは、ア・プリオリなものから経験への関連を説明することでもある。それは演繹である以上、ア・プリオリな一般的な原理から、個別的な経験に基づく認識への系統的な説明でもある。カントのその演繹は、数学におけるほどの厳密性はないにしても、実際には種々の系を含みながら、単純化していえば、すでに述べたように、統覚による総合的統一、生産的想像力〔構想力〕、そして覚知の総合(第2版にしたがっていえば)へと進むのである。これら3つの諸原理は、実はア・プリオリなものから経験への関連を説明するための諸原理である。これら3つの諸原理に関しては今は述べない(すでにさきの私の論文で詳しく述べられてはいるのだが)。次にカントのいう2種類のア・プリオリな概念に関して述べる。ここではもちろんこれらア・プリオリな概念について述べるのは、超越論的演繹に関連してのことである。

2種類のア・プリオリな概念(A_{B118}^{85})とは、感性の形式としての空間および時間の概念、そして悟性の概念としてのカテゴリーである。カントによるとこの2種類はまったく異なっているが、両者とも完全にア・プリオリな対象と関連するという点において、一致しているという。そしてカントはさらに次のようにいう。この2種類のア・プリオリな概念について、経験的演繹をしようとするのは全く無駄な仕事(A_{B118}^{85-86})ときめつける。そして他のところでは経験的演繹は本来、演繹とは呼ばれないもの。それは事実問題に関していて、そのような演繹は「純粹認識の所有の説明」die Erklärung des Besitzes einer reinen Erkenntnis(A_{B119}^{87})と名づけられるべきものだという。これは何を意味するのか。すでに述べたことであるがカントによると経験、そして経験をもとに構成される認識のうちに、ア・プリオリな概念が存在するというのが基本的な前提なのである。カン

トの有名な言葉を引用すれば「しかし、たとえ私たちの認識が経験とともに始まるとしても、それだからといってあらゆる私たちの認識が必ずしも私たちの経験から由来するものではない」(B1) 経験からはけしてでてこないア・プリアリな概念が存在することを暗示する。するとここに次の問題が生ずる。このア・プリアリな概念は経験によっては説明されえない。これにもかかわらず、このア・プリアリな概念は対象と関連する。つまり、ア・プリアリな概念は経験を成立せしめ、経験から構成される認識の要素となっている。とするならば、このア・プリアリな概念が経験そのもの、認識そのものにどのように関連しているのかが理論的に説明されなければならない。その説明は、ア・プリアリな概念が経験と独立である以上、経験によっては当然、説明されることはできない。これがカントが経験的演繹を無駄な仕事といい、経験的演繹は本来、演繹とは呼ばれないということの意味である。経験がア・プリアリな概念に対して、せいぜいなすことができるのは、そのような純粹概念を所有するようになったきっかけを与えるにすぎないという。結論を急ごう。超越論的演繹とは、それだから、経験あるいは経験に基づく認識に、ア・プリアリな概念が存在するとするそのカントの主張から、要求されることなのである。すなわちア・プリアリな概念が、経験や認識の成立に欠くことのできない要素であるかぎり、そのア・プリアリな概念が、経験や認識の成立にどのように関連しているのかが説明されなければならない。それが超越論的演繹の本質なのである。もっと簡単にいえば、経験や認識のうちに経験に依存しない、ア・プリアリな概念が存在するという、カントの主張から要求される説明が超越論的演繹ということになる。カントのいうア・プリアリな概念とは感性の形式である空間と時間、そして悟性の概念としてのカテゴリーであった。とすると、2種類の超越論的演繹が要求されることになる。カントによると空間と時間に関してはすでに感性論において、この演繹がなされた。すでに私たちは、それが超越論的論究に相当することを見てきた。残っているのはカテゴリーに関する超越論的演繹である。ところがカントにいわせると、このカテゴリーによる演繹には、空間および時間の演繹にないむずかしさがあるという。一体それは何であるのか。それは簡単にいえば、カテゴリーそのものもつ本性によるのであるが、以下、カテゴリーの演繹にともなう、困難さについて述べよう。

まずカントは空間および時間の超越論的演繹に関して次のようにいう。感性論において、空間および時間の概念の超越論的演繹〔論究〕という手段を使って、なぜその源泉まで追求したのか。そしてまたその概念のア・プリアリな客観妥当性を説明し、結論づけたのか。空間に関していえば、その感性論において幾何学の合法性をカントはすでに説明しておいた。空間がア・プリアリな直観形式であること、つまり幾何学的認識はこのア・プリアリな直観形式によって根拠づけられているので、幾何学の諸原理〔公理〕はそれ自体証明性をもつことが証明されたわけである。しかしカントにいわせると、幾何学という学問は、ア・プリアリな純粹認識として、自分の確実な歩みを進めている。したがって、幾何学の純粹で合法的な素性に関して、哲学にその正当なことの証明書を要請する必要は全くない(A⁸⁷_{B120}) という。それなのに何故、空間と時間の概念に関して、超越論的演繹がなされたのか。簡単にいえば、純粹悟性概念〔カテゴリー〕は空間の概念を感性的直観の諸条件を越えて使用する傾向があるので、そのために空間の概念に関して、超越論的演繹が必要だった

という。より詳しくいえばカントのいい分は次のようになる。純粹悟性概念は感性のすべての条件がなくても、一般的に諸対象と関連するとの特色をもつ。また他方純粹悟性概念は経験に根拠づけられているわけでないから、いかなる客観も提示できない。このことは次のことを意味する。純粹悟性概念を使用するさいに、その純粹悟性概念のもつ客観妥当性や制限に関して疑念を生じさせる。なぜなら純粹悟性概念だけでは、客観妥当性を越えて使用される可能性があるからである。たとえ、純粹悟性概念がその綜合において、ア・プリアリな空間や時間の概念を含めたとしても、純粹悟性概念はたとえば空間の概念を、感性的直観の諸条件を越えて使用する傾向がある。そこでその空間の概念を純粹悟性概念があいまいなものとしなないためにも、空間の概念に関して超越論的演繹が必要だったのである($\text{A}^{88}_{\text{B}^{120-121}}$)という。これが純粹悟性概念に関して、カントがたんに純粹悟性概念それ自身だけでなく、空間に関して、超越論的演繹を求める、不可避的な要求 *die unumgängliche Bedürfnis* ($\text{A}^{88}_{\text{B}^{120}}$) だということである。しかし私たちはもう少し詳しい理由をカントからきくことにしよう。

カントのより詳しい説明をやや補足して、述べれば次のようなことになる。空間と時間の超越論的演繹によって、空間と時間の概念がどのように諸対象と必然的に関連するのか、あるいはこれら諸対象の総合的な認識がどのようにして、すべての経験とは独立に可能となるのか。これは多少の骨折りでもって理解させることができた。それは空間と時間というア・プリアリな感性の純粹形式をとおしてのみ（あるいは介してのみ）、ある1つの対象が私たちに現象するということである。すなわちそれは経験的直観において、ある客観 *ein Objekt* が存在することを意味する。いい換えれば諸現象としての諸対象が諸対象として成立するためには、ア・プリアリな純粹直観としての空間と時間があってこそ成立する。そしてまた経験的直観において、ある客観が存在しうるのは、分析すればそれを成立せしめているア・プリアリな空間と時間が、その客観に含まれていること、含まれているからこそ、その客観の客観妥当性が保障されうるのである。カントにいわせれば、それは次のことを意味する。すなわちア・プリアリな空間と時間〔これらはア・プリアリな概念で経験に依存しないのであるが、逆に経験を成り立たせるア・プリアリな条件であるということによって〕は、すべての経験と独立に、諸対象と必然的に関連するのかが説明されて、納得させられた($\text{A}^{88}_{\text{B}^{121-122}}$) とするのである。

それに対して、カテゴリーの演繹は難点を含む。今、当面のテーマの材料としているこの第13項ではカントはその難点を示すだけで終わっている。その難点を次に示すが、私たちは、これが実際に解決された形で、純粹悟性概念の演繹で表現されているのを見る。したがって、難点を示したのちに、この論文では純粹悟性概念の演繹での解決をふまえた仕方で論述していくことにする。カントがここで示しているカテゴリーの演繹の難点を要約すると次の3点となる($\text{A}^{89}_{\text{B}^{122}}$)。しかしこの3点は①は②に、②は③にと関連していて、その相違を厳密に区分することはむずかしい。カントの文章にしたがって区分したものである。

- ① 悟性による諸カテゴリーは次のような条件を全く示していない。つまりその条件の下で直観における諸対象が与えられている、といった条件である。

② またそれだから、私たちに諸対象は現象するが、諸対象が悟性の諸機能と必然的に関連しなければならないということはない。

③ そして、それだから悟性は諸対象のア・プリアリな条件を含んでいるということもない。

これら難点に関して純粹悟性概念の演繹で、解決の手段として示されているのは、次のとおりである。これら3つの点を満たすような仕方では示されているということである。まず①に関していえば、超越論的演繹において、カテゴリーには直観における諸対象が必ず与えられていなければならないということが示されなければならないということである。そしてまた諸対象が与えられていないとすると、客観的妥当性がでてこないということが述べられなければならない。このことは次のことを意味する。超越論的演繹の第2版の論述を先き取りしていえば、「統覚の総合的統一」とは、悟性としての統覚の働きが中心となるが、それは内容的には「総合」ということによって、カテゴリーの中に直感的な諸対象が必然的に与えられていることを表明しているのである。②に関して、カントの説は現象する諸対象が悟性の諸機能と必然的に関連しなければならないということを示すにある。その論理は空間と時間の直観形式が現象を成立させて、客観を存在せしめる、と主張したのと同じ論法である。すなわち現象する諸対象カテゴリーと必然的に関連することにより、認識が成立する。しかもそのことによって客観性が保証されるのである。③に関して、演繹でのカントの説明はカテゴリーがまさに認識が説明するためのア・プリアリな条件であることを示すことにある。ア・プリアリな感性の直観形式である空間と時間を含んでいる諸対象を、カテゴリーは必ずしも含まなくてもよいと仮定して、これとは別に、認識が成立するためには、悟性のア・プリアリな条件を必ず必要とすることをカントは説明しなければならない。その意味でカテゴリーは認識が成立するための必然的な条件なのである。そしてカテゴリーこそ認識の客観性のもっとも根本的な根拠なのである。

上記のカテゴリーの演繹の困難さに関して、カントは次のように述べる。「それだからここに私たちは感性の分野では出会うことのなかった困難が明らかになる。すなわちそれは思考の主観的諸条件がどのようにして客観的妥当性をもつべきかということ、いいかえれば、どのようにして諸対象のあらゆる認識の可能性の諸条件を与えるべきか、ということである。というのは悟性の諸機能がなくても、確かに直観における諸現象は与えられうるからである。」(A⁸⁹⁻⁹⁰_{B¹²²}) ①～③で示されたカテゴリーの演繹をおこなうときに生じる難しさを、カントは思考の主観的諸条件 *subjektive Bedingungen des Denkens* (A⁸⁹_{B¹²²}) とまとめて名づけたと解される。つまり悟性の諸カテゴリーは本質的に経験とは独立であるので、なんら制限なしに、それ自体として機能する働きを本性上もっていることを指摘し、それは客観性をもつとは思われないので、主観的条件と述べているのである。したがってこの観点からいえば、思考の主観的諸条件が、どのようにして客観的妥当性をもちうるのか、いいかえれば思考の主観的諸条件が、どのようにして諸対象によるあらゆる認識の可能性の諸条件を与えるのか、カテゴリーの演繹のもう1つのテーマとなってくる。確かに思考の主観的諸条件だけでは客観的認識は生じない。カントの理論は本来思考(あるいはカテゴリー)がもつ主観的諸条件が、どのようにして客観的妥当性をもつものになっていくのか、あるいは現象に

よって与えられた諸対象を含みながら、思考（カテゴリー）がどのようにして認識となり、客観的妥当性をもつものとなるのかを説明しなければならなかったのである。これがまさに「超越論的演繹」のもう1つの本質であり、意図なのである。すでに与えられたように、第1版と第2版ではその説明方式において異なることを述べておいた。第1版では認識の成立する時間的経過にしたがって、認識の根本原理である統覚へと到達することに力点がおかれているのに対して、第2版では統覚から認識の成立が説明されている。だから超越論的演繹とは本来形式的には、ア・プリオリなものから経験へ、あるいは認識へと進めることであり、また一般的な原理から特殊的な原理へと説明することが1つの本質であった。と同時にもう1つのカテゴリーの超越論的演繹の本質とは、内容的には思考の主観的諸条件がどのようにして客観的妥当性をもちうるのか、を説明することでもある。あるいはやや内容に立ち入っているのであれば、次のようにいうことができる。超越論的演繹とは、まず第1に、認識が成立するため悟性のどのような原理と、どのような仕組みとによる機能によって、成立するのかが説明されなければならないということである。と同時に第2に、認識の客観性の条件である、一般性と必然性がどのように獲得されるのかが説明されなければならないのである。カントが第13項の最後において「原因の概念」を1つの事例として引き合いに出して説明するとき、カテゴリーの演繹によって当然説明されなければならないとの含みをこめて、「原因の概念」のもつ、一般性と必然性に言及しているからである。最後に少しだけそのことについての要点を述べておこう。

カントは「原因の概念」は、カテゴリーの演繹において、けして経験によっては説明されえないこと、この概念〔原因〕は完全にア・プリオリな悟性のうちに根拠づけられてのみ、説明されることができるとする。そしてカントははっきり、次のようにいう。「なぜならば、この〔原因の〕概念は是が非でも次のことを要求する。すなわち、或るものAは、他のものBがそのAから必然的にかつ端的に一般的な規則にしたがって生じる、といった性質のものであるということである。」(A⁹¹_{B¹²⁴})そしてひきつづきカントは次のように付言する。諸現象は規則が可能となる多くの場合を提供してはくれるが、けしてその結果が必然的であるという場合を提供してくれない。そしてこの原因と結果との総合には1つの威厳 eine Dignität が付着している(A⁹¹_{B¹²⁴}) というのである。この「威厳」という語によって、カントは原因と結果の結びつきの、必然性と同時に、一般性を主張しているのである。

第二章 演繹の諸原理のための準備——概念と直観

超越論的演繹の諸原理とは第2版に従えば「統覚の総合的統一」「想像力〔構想力〕の総合」そして「覚知の総合」である。そして第1版に従えば、「感官によるア・プリオリな多様なものの通観」「想像力〔構想力〕による多様なものの総合」そして「根源的な統覚によるこの総合の統一」である。これら諸原理には、いわば系として、いろいろな事柄が関連して、とりわけ第2版では説明される。したがって諸原理によって説明される超越論的演繹の内容は、それほど単純ではない。

それら諸原理とそこから導き出されてる系に関して論じることは、この論文のテーマではない。しかしこの3つの諸原理だけに関し、非常に単純化するというならば、それは概念と直観の関係に帰着する。なぜならば想像力〔構想力〕はいわば、概念と直観の間の中間項として機能するからである。そこでこの章では、まず第1に概念と直観の関係について論ずる。しかし直観および概念に関してはすでにカントは感性論と論理学の最初の部分で、要領よく述べているが、ここでは3つの諸原理を念頭におきながらやや立体的に論ずるのがこの章の目的である。そして次には概念の形成そのものにおいて、直観の内容が重要であることが強調される。超越論的演繹を見るとき3つの諸原理では、統覚が最も重要な原理であるとの印象をもつが、実際にはそれに劣らず、概念の形成には直観の内容、すなわち「覚知の総合」が重要だからである。そして最後にカントの経験論への批判をつけ加えておこう。

直観と概念とに関して、整理された仕方で感性論で述べられているのは次の箇所である。「感性がなければ私たちにどのような対象も与えられないだろうし、また悟性がなければどのような対象も思考されないだろう。内容を欠く思想は空虚であり、概念を欠く直観は盲目である。」(A⁵¹_{B⁷⁵}) は有名である。そして「超越論的論理学の理念」において、次のような内容からカントははじめる。私たちの認識は、2つの根本源泉から発すること、第1のものは諸表象を受取る能力、第2のものはこれらの諸表象をつうじて1つの対象を認識する能力であるとする。そして前者によって私たちに対象が与えられ、後者によってこの対象がああなる関係において思考される。そしてそのあと次のようにいう。「直観と概念とはそれだから、あらゆる認識の要素をなしている、だから概念になんらかの仕方で対応している直観なしの概念も、概念なしの直観も認識を与えることはできない。」(A⁵⁰_{B⁷⁴}) つまり認識を形成するのは、直観と概念があってこそ可能であること、いずれか一方を欠いては、認識は成立しないとカントは述べているわけである。ところが第1章の結論は、概念、それもア・プリオリな概念(カテゴリー)は本性を経験を越えて機能するために、そこに演繹のむずかしさがあると述べたのであった。つまり、簡単にいえば概念と直観が結びつかなければならない理由は本来ないことになる。それなのに、なぜ概念と直観は結びつかなければならないのか。理由は簡単である。この概念と直観が結びつかなければ、上記の2つの引用で示したように、認識は成立しないのである。とするとカテゴリーの超越論的演繹とは何を意味するのか。認識が成立することを前提にして、どのように認識が形成されるのかを説明することにその本来の目的があることになる。カントによれば、ア・プリオリな概念が経験を越えて、機能する場合も実はあるのである。そのような認識はまさに誤謬であり、カントはそのような純粹概念の使用を「超越的」と呼んでいることはよく知られていることである。ここではこれ以上、カントの誤謬論に関して述べることはやめる。とするとカテゴリーの超越論的演繹とは、真の客観的な認識が、どのように形成されるのかを一般的原理から説明することである、ということになる。認識の客観性ということに力点がおかれるならば、どのようにして認識の一般性と必要性が説明されるのか、ということでもある。とにかく以下、真なる認識が形成されることを前提に、概念と直観の結びつきについてのカントの考え方を見ていこう。正確さを求めるために、やや引用が多くなる。

まず次のカントの文章から始めよう。「総合的表象 *synthetische Vorstellung* とその対象 *ihre Gegenstände* とが一致し、互いに必然的に関係し合い、かついわばお互いに対応することができるのは、ただ2つの場合だけが可能である。対象だけがその〔総合的〕表象を可能とする場合か、それともこの〔総合的〕表象だけが対象を可能にする場合かのいずれかである。」(A⁹²_{B124-125}) ここだけを出すと、やや難解である。意味は総合的表象とその対象とが互いに必然的に関係し合うとき、2つの場合が考えられる。(A)対象だけが総合的表象を可能にするのか、逆に(B)総合的表象だけが対象を可能にするのか、どちらがより基本か、という問題である。いい換えれば、認識を形成するのに、総合的表象のもつア・プリアリな概念が、対象を可能にする、とカントはいいたいわけである。

カントの主張は経験を分析すれば、そこにア・プリアリなものがある、そのア・プリアリなものこそが逆に経験を成立せしめている、という。しかし通常、人は経験にア・プリアリなものがあるとは考えない。ここにカントの理論を説明することのむずかしさがある。ところでこの引用文ででてくる総合的表象も、その対象も経験から構成される認識のうちにはア・プリアリなものがあるとするカントの考え方をふまえて、認識を分析したことによって考えられた概念なのである。だから「総合的表象」は感性論にでてくる「表象」とは異なる。この「総合的表象」は感性論に出てくる「表象」とは違って解釈されるべきものである。つまり「表象」はあくまで現象のレベルの問題で、それに対して「総合的表象」は悟性論のレベルの問題で、認識の成立の問題である、というのが私の理解である。実際以下のカントの説明を見れば、全くそのことは了解されるだろう。したがってレベルをかえれば、(A)か(B)かの問題は感性論のレベルに関してもいえることでもある。カントはそのように述べているわけではないが、同じ論法をあてはめるならば、おそらく次のようになる。(a)対象だけが表象を可能にするのか、逆に(b)表象だけが対象を可能にするのか。そしてカントは(b)と答え、次のようにいうだろう。表象の中にア・プリアリな直観形式の空間と時間があって、それが対象そのものを現象として成立させるのであると。同様のことが(A)と(B)に関して、述べられる。(A)に関してカントは次のようにいう。この関連は経験的であるにすぎない。だからその表象はア・プリアリに可能ではない。これは今までの私たちの理解からいえば、ア・プリアリに可能でないのだから、カテゴリーの演繹としては不適切ということになるだろう。またカントはこれは現象に関しての場合であり、その諸現象において、感覚に属するものに関するときのものである、という。これはこのとき表象は現象にとどまり、認識の段階に到達しえないことを意味する。認識の段階に到達するためには、思考(カテゴリー)がつけ加わらなくてはならない。(B)に関して、カントは次のようにいう。表象それ自身はその表象の対象をその現存在にしたがって *dem Dasein nach*, 生み出すことはないけれども、表象は対象に関して、ア・プリアリに規定するのは、その表象によってのみ、或るものを1つの対象として認識することができる場合である(A⁹²_{B125})。カントがここで、総合的表象が対象をア・プリアリに規定するといっても、それは特殊な場合であるとも解せる。表象それ自身はその表象の対象をその現存在にしたがって生み出すことはないけれども、とは次のことを意味する。もし生み出すとするならば(A)の場合

になってしまうからである。なぜならば対象がその表象をつくり出すことになるからである〔通常そのように考えるのが普通のことなのだが、カントの考え方は逆をいう。それはア・プリアリな概念の存在を主張したためである〕。そして表象が対象に関して、ア・プリアリに規定する場合があることが述べられている。それは或るものを1つの対象として認識することができる場合である。それは次のことを意味する。それは現象として与えられた対象を越えて、より正確に言えば、その対象を素材として総合的表象に含めて、或るなにものかが認識されることである。そのとき或るなにものかは、この総合的表象のうちにあるア・プリアリなカテゴリーの原理にしたがって構成されることを意味しているのである。さらにカントは認識が成立するための条件に言及して、次のようにいう。「しかし対象の認識がそのもとでのみ可能となる2つの条件がある。第1は直観であって、この直観をとおして対象は現象としてのみ与えられる。第2は概念であって、この概念をとおして、その直観に対応する或る対象が思考されるのである。」(A₁₂₅⁹²⁻⁹³) 対象の認識が成立するための2つの条件、それが段階的に与えられている。ここにカントの考え方の基本が示されている。まず第1段階は直観、この直観をとおして与えられる対象は現象としての対象である。次の第2段階では概念が登場する。この概念をとおして、その直観に対応する或る対象が思考されるとは、この段階において、認識が成立するのである。第1段階で与えられる現象としての対象そのものは認識とはなりえず、第2段階における概念において、現象としての対象はその概念の材料として提供される。したがって第2段階において、認識が客観的なものとして成立するためには、現象としての対象があらかじめ含められていることが必要である。いいかえれば、現象としてのその直観に対応する、或る対象がない場合には、あるなにものかが思考されたとしても、それは客観的認識とはなりえないことを意味する。

カントによれば、直観のうちにすでにア・プリアリなものが存在する。それは直観の形式としての空間と時間であり、諸対象が現象するとき、すでに直観形式が含められていて、その結果として諸対象が現象することができる。いいかえれば、諸対象が経験的に、直観され、また現象として私たちに与えられるのである。カントによれば、現象の成立は直観形式である空間と時間の機能した結果である。だからア・プリアリな空間と時間なしに、諸対象は現象することはないし、経験的に直観されることはない (A₁₂₅⁹³)。

しかし重要なことはこの第1条件で認識が成立するわけではない。そのためには第2条件が必要である。つまり概念によって、直観に対応する或る対象が思考される (A₁₂₅⁹²⁻⁹³) とは何か、が問われなければならない。カントは次のようにいう。「ところで、問われるのは、ア・プリアリな諸概念もまた、或るものがそのもとでのみ、たとえ直観されないにしても、それにもかかわらず、或るものが対象一般として思考される諸条件として先行するのではないか、ということである。というのはそのとき〔ア・プリアリな諸概念が先行するとき〕には諸対象のすべての経験的認識は、こうした諸概念に必然的にしたがうからである。なぜならば、そうした諸概念を前提することがなければ、経験の客観としてはなににも可能でないからである。」(A₁₂₅₋₁₂₆⁹³) これは簡単に言えば次のことを意味する。直観のさいに現象の成立すること、それはすでにア・プリアリな純粋直観が入り込ん

だ結果である、と主張された。それと同様に概念に関しても、諸対象に関するすべての経験的認識が成立するためには、ア・プリオリな諸概念が先行すると考えないわけにはいかないということである。なぜなら、カントによるとすべての経験的認識は、こうしたア・プリオリな諸概念に必然的にしたがった結果として、現れるからである。それはまたその逆を述べることによって主張される。つまりそうしたア・プリオリな諸概念が先行するということを前提しないなら、経験の客観としてなにもものも可能でないというのである。

ひき続きカントはこの概念と直観の関連から、ア・プリオリな概念が経験認識の根底に入り込んでいること、いいかえれば諸カテゴリーの経験の諸対象と必然的に、かつア・プリオリに関連することが述べられる。この箇所ではカントは諸カテゴリーに関して2つの重要な点を指摘する (A⁹³_{B¹²⁶})。

① ア・プリオリな諸概念としての「諸カテゴリーの客観的妥当性」die objektive Gültigkeit der Kategorien は次のことは基づいていること。すなわち経験（思考の形式からいえば）は諸カテゴリーによってのみ可能であるということ。

② 諸カテゴリーを介してのみ、一般に、経験のなんらかの対象が思考されうるということ。その箇所を引用し、そしてカントの主張を結論づけよう。「ところがすべての経験は、それによってなにもものが与えられる感官の直観以外に、直観において与えられ、現象する、或る対象についての概念をも含んでいる。したがって諸対象一般についての諸概念はア・プリオリな条件として、すべての経験認識の根底に横たわっている。だからア・プリオリな諸概念としての諸カテゴリーの客観妥当性は、次のことに基づいている。すなわち経験（思考の形式からいえば）は諸カテゴリーによってのみ可能であるということである。なぜならばそのとき諸カテゴリーは、必然的、かつア・プリオリに経験の諸対象と関連するからである。というのはカテゴリーを介してのみ、一般に経験のなんらかの対象が思考されうるからである。」(A⁹³_{B¹²⁶})

諸カテゴリーが経験認識の根底にあるということは、次のことを意味する。諸カテゴリーによって、なんらかの対象が思考されて、認識が成立するということである。ここでなんらかの対象とは思考が第2条件であるかぎり、直観が素材として含まれているのは当然である。②は認識が成立するためには、諸カテゴリーが不可欠であることを示している。そして諸カテゴリーの客観妥当性は真なる認識の客観性の根拠が、実は諸カテゴリーの成立そのものにあることを示している。したがって①は次のことを意味する。認識が諸カテゴリーによって構成されたということ、それは諸カテゴリーが認識の要素としてまさに入り込んだということによって、認識の客観的妥当性が示されたことでもある。したがって諸カテゴリーの成立は同時に認識の客観性の成立をも意味する。いいかえれば、カテゴリーの成立はたんなる経験から客観的認識への確立なのである。すなわち認識の一般性と必然性の成立を意味する。これがカントの主張の結論なのである。そして私たちはこの点をしっかりと踏まえないと、カテゴリーの演繹におけるカントの考えを十分に理解できないことになるだろう。以上の論点をふまえて、カテゴリーの超越論的演繹とは何かを、もう1度ふり返ってみよう。私たちはカテゴリーの超越論的演繹とはどのようにア・プリオリな概念が経験の形成にかかわりをもつのかを説明することにあること、そしてさらに学的な認識論の立場からいえば、経験

から構成される私たちの認識はどのような仕方であ・プリアリな概念とかわりをもつのか、あるいはどのような仕方である、一般性と必然性を獲得するのかを説明することであるとも述べた。しかし認識の客観性に関していえば、カテゴリーが成立することは認識の客観性の成立をも意味することを示した。とするならば、この点からいえばカテゴリーの超越論的演繹とは、どのようにしてカテゴリーは成立するのかを説明することでもある。実際、カテゴリーの超越論的演繹でカントが展開する議論に現れる諸原理は、どのようにカテゴリーが形成されるのかの諸原理による説明と理解することができるのである。そしてとりわけ「統覚の総合的統一」はカテゴリー形成のもっとも基本的な原理と見ることができる。いやそればかりでない。「覚知の総合」もカテゴリーの形成に大きな役割を果たしているのである。そして、それはすでに第13項において、それを暗示する言及をカントがしているのである。次にそのことにふれておきたい。

カテゴリーの演繹の第2版では第1版とやや異なって、カントは「覚知の総合」を全く経験的综合 (B164) といっている。もちろんこの覚知による総合は多様なものを常に空間と時間という直観形式に適合していなければならない (B160) が、さらに覚知はそのうえで多様なものを総合する働きをもつのである。そのときこの「覚知の総合」がカテゴリーの形成に1つの役割を果たしていることがここで述べたいことなのである。そしてこれは案外見過ごされていることである。第13項のその箇所では当然ながら「覚知の総合」とはいわれていない。「感官の諸印象」die Eindrücke der Sinne の語が使われている。そこでカントは「…感官の諸印象が諸概念に関する全認識を開始させ、そして経験を成立させる最初のきっかけを与える…」(A⁸⁶_{B118}) と述べている。そしてカントは「経験」を2つの要素に分ける。つまり諸感官に由来する認識のための実質と、この実質を秩序づけるある種の形式である。そしてカントは次のようにいう。純粹直観と純粹思考は実質を機会として、はじめて活動させられて、そして概念を産みだす (A⁸⁶_{B118}) といっている。ここではっきりとカントは、諸感官に由来する認識のための実質が、概念の形成に1つの役割を果たしていることを述べている。今まで私たちは、ア・プリアリな概念の立場からのみ、ずっと論じてきた。それだけを見ると、ア・プリアリな概念だけが経験および経験から構成される認識を形成するかの印象をもってしまふ。それだけではない、かえって「覚知の総合」あるいは感官の諸印象といったものが、逆にカテゴリーの形成そのものに寄与しているのだということをいいたかったのである。カントは第1版のカテゴリーの演繹の中で、諸現象それ自体は感性的表象以外の何者でもないとしながら、その背後に或るもの一般 = X として als etwas überhaupt = X ある対象を考える。そして次のように述べる。「しかし私たちが気付くことは、あらゆる認識とその対象との関連に関して、私たちの思想が、なんらかの必然性をうちに含んでいるということである。すなわち対象は、私たちの認識が当てずっぽうに、あるいは任意に規定されているものとは反対のものとして、かえってある仕方規定されているものと見なされるからである。というのは私たちの諸認識はある対象と関連しているはずであるのだから、それはまた必然的にお互いに間で、この対象と一致していなければならない。すなわち私たちの認識は、ある対象の概念を形成するような、そのような統一をもっていなければならないからである。」(A104-105) これも、カテゴリーの形成に直観の内容 (実質) が大き

な役割を果たしていることを示している箇所と解釈できないであろうか。

最後につきの2点をごく簡単に付記しておきたい。ここは第2版で第14項につけ加えられた部分である。第1は「実体のカテゴリー」についてであり、第2はカントのロック及びヒュームに対する批判である。カントは実体のカテゴリーが諸カテゴリーの中で重要な意味をもつという。定言判断のたんなる論理的使用においては、両概念のどちらに主語の機能を与え、またどちらに述語の機能を与えるべきかは全く規定されないままだった。しかしいったん「実体のカテゴリー」が導入されれば、定言判断の主語・述語の関係が規定されるという。そして、経験における物体の経験的直観が、つねに主語とただけとみなされるのはこの実体のカテゴリーが導入されてはじめて可能になるという。

カントのロック及びヒュームに関する批判の極め付けは次のとおりである。要約すると、ロックやヒュームがア・プリオリな概念を経験から導き出そうとしたが、それは失敗である。ア・プリオリな学的認識、すなわち純粋数学や一般自然科学とが現実に存在することと一致していない。つまり、これらア・プリオリな学を経験によっては説明しえないこと、しかし実際には、ア・プリオリな学が存在しうるという事実によって、ロックやヒュームの説それ自体が論駁されてしまう(A₁₂₇^{B₁₂₈})。カントの真意は次のところにある。ア・プリオリな概念はア・プリオリな原理によってのみ説明されること。もっと詳しくいえばア・プリオリな概念と経験との関連が説明されて、はじめて理解されうるものである、といたいのであろう。

〔注〕

- (1) (A)カントの第1版における「純粋悟性概念の演繹」 鹿児島県立短期大学「人文」第4号 1980年
(B)カントの第2版における「純粋悟性概念の演繹」 鹿児島県立短期大学紀要 第33号 1982年
カントが主張するように、「第1版」「第2版」に本質的な相違はなしとの立場から(A)(B)は書かれた。
方法に関する相違に関しては(B)において、「第1版」と「第2版」の違いを論じておいた。
- (2) 「純粋理性批判」のページ数は第1版はA、第2版はBで表記した。
(Philosophischen Bibliothek Band 37a). Kritik der reinen Vernunft. Nach der ersten und zweiten Original-Ausgabe neu herausgegeben von Raymund Schmidt に示されている表記をそのまま使用した。
- (3) (1)の(B)の33ページ。

(2002年10月1日 受理)